
史上最強の転生者レイ

ウルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

史上最強の転生者レイ

【Nコード】

N9044T

【作者名】

ウルフ

【あらすじ】

主人公が神の失敗からいろいろと転生しまくって最終的に史上最強の弟子の世界にたどり着いた話です。基本的に売られたケンカは買うタイプの主人公は、転生した世界で親に捨てられ、拾われ、そして・・・処女作&作者に文才がないため、酷い物になると思います。そこは了承してください。

キーワード変更しました。

オリ主&オリキャラ設定

柘榴 さくろ
零 れい

銀の長髪、銀の瞳。左に眼帯を付けている。

コードネーム zero

身長 154cm

全長 162cm

性別 男

誕生日 6月6日

好きなもの 料理、歌、動物、読書、仲間、梁山泊の皆さん

嫌いなもの 喧嘩、熱血な人、甘ったるいもの、酒、うっとおしい奴

一人称 俺

二人称 君、きみ呼び捨て、く君、くちゃん、くさん、その人

三人称 二人称+それ、あれ

神の失敗から、輪廻転生の輪に入れなくなってしまった少年。
神との取引の末、転生できなくなる前の姿を何度も繰り返し生まれ

てくることや記憶を移行させるのを条件に輪廻の輪に入れないことを承諾した。

以降、いろいろな世界に輪廻の輪を解せず転生している。たいてい死ぬのは神からの頼みがありほかの世界に行くことになるとき。

14歳のときに死んだため、転生しても14歳ぐらいまで成長したら成長が止まる。なのでどう頑張っても身長が伸びない(笑) 神の頼みを聞く代わり、何らかの能力をもらっている。(例・傷がすぐに治癒する能力、透視能力など)

最初に生まれた世界はゴッドイーターの世界で、目の前で母親や友達を殺され、目の前で自分の大切な人が傷つくことを極度なまでに嫌う。本人いわく「自分の過ちを忘れないための枷」として記憶を移行させているとか。

左目には「龍の邪眼」という呪われた瞳を持ち、そのために左は眼帯をしている。

一個前に転生した世界で「史上最強の弟子ケンイチ」の漫画を読んでいた。

あまり怒らないが、怒ると怖い。鬼を越して死神に見える。本気で怒ると感情も自我もなくなる。

見た目は髪が長く、よく少女に間違えられる。輪廻から抜けてしまっ前の、一番最初に生まれた時の母親に似ている。

昔は付き合いいで飲んでいてお酒は全然平気だけど、身長が伸びなくなると知って、飲まなくなつた。

基本的に売られた喧嘩は買う。目があった奴はとりあえず殴る（ヤクザや危ない奴のみ）。

裏社会ではお恐れられており二つ名は「銀の死神 柘榴のゼロ」
銀色の髪、仕事終わりの返り血、勝率0%から由来している。

梁山泊の皆さんが知っているほど有名。

活人拳と殺人拳両方の使い手だが基本は活人拳。静と動両方の使い手。

実力は謎で、自称弟子クラスだが特Aクラスの師匠たちに匹敵する技がいくつか使える。

ケンイチの世界に生まれ落ちた時、父親は不気味な左目を気持ち悪がり母親を捨てて出ていく。

4歳になった日に母親に捨てられた。

そのあと達人に拾われ「殺す覚悟」と「生かす覚悟」と多彩な技を教えられる。

黒狼の「ダークルナ」と3回目の転生の時主従関係を結び、行動を共にする。零が生まれ変わるとき、すでに転生先の世界に移されている。

たいてい黒い服を着ている。たまに仮面をかぶって出没。
名前を知られたくないときは「歪ストライク」と名乗っている。

座右の銘は「弱肉強食、下剋上、やられたら千倍返し」

ダークルナ

性別 男

一人称 我

二人称 童、ぬし

零の呼び方 我が主

零と行動を共にする聖霊獣。普段は黒狼の姿をしている。人語を理解し、しゃべれる。闘忠丸の遊び相手になったりして日々を過ごしている。

たまにだが人の姿で現れるときがある。人型のときは黒髪の短髪、赤い瞳。

基本的になんにでも化けるので、一番最初の姿が何だったか忘れかけている。

零と一緒にいて二つ名ができ「黒翼の狼」「黒騎士ブラック・ナイト」という。

オリ主&オリキャラ設定（後書き）

とりあえず設定完成！これから頑張っていきます！！

しばらくしたら、零を拾った達人も入れようと思っています。
達人の名前募集中です。

プロローグ

といおとおいはるかみらい、かれにとってをはるかむかし

しんじる”かみ”のまったくくない、”いつわりのかみ”がはびこるせかいに

ひとりのしょうねんがいました

あるひ、しょうねんはめのまえではおや、ともだち、やさしくしてくれたひとびとを”いつわりのかみ”にたべられてしまいました
みんなみんなたべられてしまったなか、しょうねんだけはいきのこつてしまいました

しょうねんはなげきました

「ナンデオレダケイキノコツテシマッタノ？ナンデミンナトイッシヨニシネナカッタノ？」

いくばくかのときがたち、しょうねんはせんじょうにたっていました
”いつわりのかみ”をこるすため、ふくしゅうのため、じぶんのしにばしょをさがすため……

ただただまえへとすすんでいきました

しょうねんはいつしか”えいゆう”とよばれるようになりました

しかし、かれにとってはどうでもいいことでした

しょうねんはおもいました

「オレガモトメテイタノハコンナモノジヤナイ」

きづけはあしもとはたしやのしかばね、もっかには”いつわりのかみ”のむくろ、みわたすかぎりのちのうみ

そのなかでたっているのはしょうねんだけ

それでもしょうねんはあゆむことをやめません

むくろをこえ、ときにはじぶんのなかまだったもののしがばねをふむ

どこかでうんめいがくるうおとがした

それでもしょうねんはあゆむことをやめません

”かみ”のしっぱいがかれのみらいをなくしてしまった

それでもしょうねんはあゆむことをやめません

りんねのわはかれをこぼむようになりました

それでもしょうねんはまえへあゆみつづけました

まるでまえへすすむことがかれじしんをいましめる”かせ”である
かのように

しょうねんはたちどまることをせず、ただただまえへとすすみつづ
けます

いくつものくにを、せかいを、ときをわたりしょうねんはあるきつ
づけている

たとえ”し”であっても”かみ”であっても、かれのゆくてははば
めない

「ダレニモジャマハサセヤシナイ」

いまもしょうねんはどこかであるきつづけている

じぶんがほんとうにいのちつきるばしょをさがすため

めでたし めでたし？

〜 誰かの書いた^{ストライプンストーリー}童話「ある少年の話」より〜

プロローグ（後書き）

いちばんはじめの輪廻の輪に入れなくなる前の人生の話

繋がってくるかもしれません・・・多分

第一話 何百回目かの死

S a i d R e i

カツン、カツン、カツン・・・

誰かが歩いてくる音が響く。それを気にもせず、前へ歩いていこうとしたが一人の青年によってを阻まれた。

「やあ、零ちゃん・・・」

見たことのある人だ。確かこの青年、先輩だったはず。名前も知らない、知る気もない。

所詮、神達あいつらの退屈しのぎに作られたものうちの一人。

「・・・なにか用ですか？」

ただ少し、ちゃん付けされたのがウザいと思った。

「ん〜、特に用はないんだけど・・・ね」

「・・・そうですか。最近はこちらも物騒なので気を付けてください。」

青年の横を通り過ぎようとしたとき

「それで……の……だ」

「え……？」

ザク、リ

だんだん意識が遠のいていく。

ああ、そういうことか。またアイツか

そこでやっと納得した。いつもいつも人を呼ぶときに殺しやがって・
・。。

くそっ、タイミングが悪いな。今日は待ちに待った『史上最強の弟子ケンイチ』の単行本発売日だったのに・。。

いつか殺してやる、とおよそ死んで逝く者の思うことには似つかわしくないことを考えながら俺の思考はいったん途絶えた。

第一話 何百回目かの死（後書き）

ごめんなさい……。めっちゃめっちゃ短いですね……。

明日また続きを更新するつもりです。

第二話 天界（前書き）

わお！もうすぐアクセス4000こえるとか吃驚！

あと1〜2話で拾ってくれた達人が出るのに名前がまだ決まんない・
・

どうしよっかな。あ、まだ募集中なんで意見お願いします。

それとこの前設定投稿したあとすぐにメッセージが来てホント嬉しかった……。

ありがとうございます？

第二話 天界

S a i d R e i

春のように暖かい気温の中、冬のように冷たいそよ風が吹く。

地面はなく、半透明なガラスのようなものの上に、少し浮いている状態で立っている。目の前には大きな大きな灰色の輪

そう、ここは天界。死んだ後に行く場所と言われている。しかし、生きとし生けるものの最後に辿りつくのは今俺の目の前にある、この灰色の輪。輪廻転生の輪の中だ。

『よお、零！久しぶりだな。急に呼び出して悪かった。』

「悪いと思ってんなら殺すなよ」

茶髪の、一般的に言ったらかっこいい部類に入らるであろう男が出てきた。

この男の背中には白い大きな翼が生えている。彼はここを任されている神、メテンフシヨウシス輪廻転生神だ。

主神の補佐もやっっているらしい。

なぜだか知らないが、いつもTシャツにジーンズという、本当に神なのか？と疑いたくなるラフな恰好をしている。それなりに高い地位にいるらしいのだが威厳もへったくれもない。・
・あ、社会の窓があいてる・・・。

やはり威厳も何もないなこいつ。

ところで、さっきからするこの視線はなんなんだ？

少し周りを見るが、目の前のこいつ以外誰もいない

「・・・で？今回は何の用だ？」

『ああ。実はある世界に生まれるはずだった人が生まれてこなくなってしまうってな。』

「またかよ。・・・今度はなんでだ？深夜番組見ながらうつかり手が滑ったとかか？」

『いや、撮りためててビデオ見てたらうつらうつらしちゃってな・・・』

「・・・は。まあとにかくその生まれてこなくなったのは漫画でいうサブヒーローあたりなのか？」

『いや、しがない通行人B。バツ2の子持ちで借金あり。』

「・・・可哀そうな設定だな。しかし、そのぐらいの奴ならいなくても・・・」

『たかが通行人と甘く見てはいけない・・・！そいつがいなくなつたせいで主人公は死に、ヒロインは悪の道へ走つたんだ！』

「なんじゃそりゃ!?!」

『そういうことだから頼んだよ。』

「まてまてまて、なんで俺があんたの尻拭いをまたしなきゃいけないんだ?」

『えゝ、だつて前に約束しただろ?生きてた時の記憶を残す代わりに俺の頼みを聞いてくれるつて。』

「う・・・、まあ確かにそうだけどさ・・・」

そのことについて言われると言い返せない・・・

『ほんと、頼んだからな。つと、そうそう。確かその世界、史上最強のなんたらかんたらつて漫画の世界だつたと思うぞ?まあ、多少未来が変わつちまっても構わないさ。とにかく主人公さえ生きてればいいんだよ。』

・・・今、こいつは何と?史上最強のなんたらつて、たぶん史上最強の弟子ケンイチだよな?しかも未来を変えていい・・・だと!?

「え、マジで？マジで？それって史上最強の弟子ケンイチの世界だよね？」

『ん？ああ、そういうえばそんなタイトルだったな。』

これは期待しても良いっばいな！！

俺は輪廻メテノフシノコウシス転生神の手をガシツとつかみ、上下にぶんぶん振った。なんか驚いて目が点になってるWWW

「っしやあ！ありがとう！！今まで何時か殺してやるとか死にさせとか思ってた悪かったな！見直したよ！！」

社会の窓が開いていることを除いてだが

『・・・??（あれ？怒ってない??いつもだったら軽く吹っ飛ばぐらい殴られるのに・・・。ていうか今まで死ぬとか思ってたんだ！??）』

「いや、実はその漫画さっき死んだ世界で読んでしまったさあ。本当にありがとう！」

フォンツと音がして黒い穴ができた。下界と天界をつなぐ穴だ。これを通る時の浮遊感吐きそうになるのだが、今回は楽しみのほうが強いのでたぶん大丈夫だろう。

さて、行きますか。

穴に入る時いつも屈伸とか準備体操をしてしまうのは何故だろう？

『あ、そうだ。選別として何か能力をやるうか？例えば、治癒能力とか』

「もう持ってる。」

『じゃあ不老の能力は？』

「それもすでにもらった。」

『じゃ、じゃあ重力を操るとか・・・』

「最初のほうにもらったぞ。」

詳しくは知らないが、どうやら俺に何か能力を与えたいらしい。

『え、えーと・・・えーつと・・・』

「どうせなら力のセーブ能力をくれ。」

『そんなもんでいいのか！？』

「ああ。・・・ダメなのか？」

『いや、そうじゃない。少し意外だったからな。』

何がだろっ？

メテンプシコウシスは少しバツが悪そうに話題を変えた。

『それより、今回も記憶はそのままでもいいのか？辛くなったらいつでも消すぞ？』

「辛くなる？だから？？これは俺の過ちだ。忘れるわけにはいかない。」

『そうか、分かった……。じゃ、気をつけて行って来い。』

「おう！ありがとな。・・・それと・・・チャックあいてるぜ！！」

勢いよく穴に飛び込んだ。上のほうから叫びが聞こえたのはきつと気のせいじゃないのだろう。

さて、向こうにつくのが楽しみだ

S
a
i
d

m
e
t
e
m
p
s
y
c
h
o
s
i
s

S
a
i
d

O
u
t

『行ったか・・・』

穴に下りて行った零を見送った後、溜息をついた。

にしても、チャックが開いていたことには気付かなかった。いつから開いていたんだろうか？めっちゃめっちゃ恥ずかしい・・・

『はあく、終わりましたよ。主神様。』

『・・・ばれておったか。』

『多分零も気付いていましたよ。』

今俺の後ろから出てきたのは神の中の神、すべての創生神、主神様だ。

『ちゃんとご命令通り能力は与えましたよ。』

『うむ。ちゃんと見ておったわい。』

『意外でしたよ。人間は欲深くて欲し続けるものだと思っていました。』

『あ奴を普通の人間と同じように見るでない。』

『そうでしたね。ついつい忘れていました。．．．それにしても、彼は強いですね。心も、精神も、魂も。』

『．．．．．』

主神様が黙ってしまったが、気にせずしゃべり続ける。

『普通だったら自分が死ぬ記憶を覚えているだけで全てが砕け散るような苦痛に見舞われ、最悪で発し二度と生まれてこれなくなるのに、彼はその記憶を何十、何百と持っていて何も壊れない。それどころか死を繰り返すたびに心が強くなっていつている。きつと力をセーブさせる能力を欲したのは周りの者を傷つけないからなのでしょう。』

『．．．．．当たり前であろう？ なんとって．．．』

わしの孫なのじゃから
『

』言つと思いましたよ。はあ……ほんといつまでたつても孫煩惱
なんですね。』

『そのくらいいいである。』

そういつて主神は去つていった。ちゃんと仕事をしているのだから

か？まあ俺だつて人のことは言えんのだが。

きつと主神も気付いているからさつき出てこなかったんだらう彼

零が俺たち神を恨んでいることに。

あたりまえといえばあたりまえだらう。

自分の目の前でいくつもの大切な命が失われていく中、助けることもままならずに分だけ嫌でも”時”が来るまで生き残ってしまう強運や、ことあるごとに勝手に能力をつけたし、彼の本当の望から遠ざけているのだから。

零は本当に強い奴だと思う。俺は一回死んだ記憶が残っているだけで、今でも気を抜けば飲み込まれてしまいそうになるといふのに……。

神になった俺は何に対して祈ればいいのかわからないがせめて祈ろう……。

んことを

願わくば、少年に一筋の光をぬくもり 幸多から

俺にはこの程度のことしかできないから

それでも、本当の”死”が来ることが望なんて悲しいこと言つなよ

S a i d
O u t

第二話 天界（後書き）

……すみません。最後の方書いててわけわかんなくなりました。

ホント、申し訳ない……

6月21日に今までの更新分の誤字を直しました。

第三話 転生（前書き）

うわああああああ、すごい久しぶりの投稿です。
コメントをくださった方、本当にありがとうございました！！

第三話 転生

S a i d R e i

暗い暗い闇の中を抜け、周囲が一気に明るくなった。

何かふわふわしたものに乘せられたとき、それがタオルで、俺がこの世界に生を受けたことに気付いた。

その瞬間に、俺は大きな泣き声をあげる。

今まで何度も転生して学んだことの一つで、生まれたばかりの子供が泣かないのはおかしいということがある。

泣かなければ、親に不安を与えてしまうらしい。

初めのころそれを知らずに泣かなかったせいで気味悪がられたことがあった。もつとも、本当に気味悪がられた理由はほかにあったのだが。

「なんだこのガキは！？気持ち悪い眼をしやがって！！」

「やめてっ！！」

パシンッ

いきなり頬に来た痛みに驚いて声が出なくなる。

あまり発達していない嗅覚でもわかるほど、ここは酒の臭いで充満していた。

「だから俺はめんどうだから墮ろせつて言つたんだ！こんな気色悪いガキなんか売つてもたいした金になんねえよ！！」

「やめてっ！この子を売らないで！！売るなんて言わないで！！」

「うるせえ！！」

「きゃっ！！！！」

見ると疲れきっている女性と、酒で酔っているであろう男がいた。たぶんこの人たちが俺の親なんだろう。

男は女性に対して暴力を振り始めた。殴る、蹴るで女性は血を吐いてしまった。

「俺に逆らうんじゃねえよ。」

そう吐き捨てて男はどこかへ行つてしまふ。

「あうっ、あうあうあ〜？」

生まれたばかりなのでちゃんとした言葉はしゃべれない。それでも言いたいことは何とか伝わったようだった。

お産で疲れきつた顔を無理やり笑顔にして女性・・・この世界での俺の母親はわらつた。

「ふふつ・・・大丈夫よ。いつものことだから・・・それより、あなたは不思議ね。右目と左目で全然色が違うなんて。それに生まれたばかりなのに左目の下に傷があるわ・・・もしかしたらあの人に殴られたせいなのかしら・・・。そうだとしたらごめんなさいね。」

ああ、この人は勘違いしている。この人のせいなんかじゃないのに。

この左目に宿る魔^まが全ての元凶。

これさえなければあんな悲劇は起きなかった

この左目のせいでたいていの家では気持ち悪がられていた。

でもこの母親は、気持ち悪がらずに、受け止めてくれた。

俺が生まれて3日目の朝、いつもの転生^{うまわかわるいき}と同じように母親^{かあさん}は俺に“零”という名をつけた

この世に俺が生を受けてから、約2年の月日がたった。

この2年間に、とても大きな変化がこの家で起きた。

まず、あの男が出て行ったのだ。理由は俺の目が不気味で気持ち悪いからだとか言っていたが、真実は違う。

ほかに女を作ってそいつと逃げたのだ。

母親に借金を残して。

俺から見ればそこまではない借金でも、母親から見たらとても払いきれぬ当てのない莫大なものだったようだ。

それから母親は変わった。あんな男でも母親にとっては最愛の人で、それをほかの女に奪われた。

そうとわかっていても目の前にいる自分の子供が理由だと言われたことから俺を嫌うようになった。

時々入る酒を飲んで俺を殴り、なんであんなんかが生まれてきたんだと罵倒した。

あの男から俺を守ってくれていた母親は変わってしまったのだ。

それでも、俺が寝た後に泣きながらごめんねという母親を俺は知っている。

4回めの誕生日の日に、少しだけいい服を着せてもらい、少しだけいい食事をして、初めて電車にいっしょに乗って、いつもは行かないような遠い町まで行って、初めて物を買ってもらって・・・とても幸せな時が流れた。

ほんの少し、ほんの少しの幻のように儂いひと時だった。

なんで急にこんなにやさしくなったのか疑問には思わなかった。

本当は少し前から薄々気付いていたから。もうすぐ捨てられることに。

しばらくして町はずれの森に少し入った所で、母親は手を離れた。

「母さん、少し離れるけど・・・ここでおとなしく待ってなさいね」

そういつてどこかへ行こうとする母親の手にそっと触れる。

びくりと震える肩を見て確信した。

「ここでお別れなんだと。」

「わらって、かあさん」

恐る恐るふりかえる母親。

俺の今の顔はこの人にどう見えているのか？

「わらって。かあさんがわらってくれたらおれも……」

驚きで大きくなった瞳を見上げる。

「……れいも……わらって、さよならできるから」

だから笑ってよ、母さん。

母親は、驚愕に顔を強張らせ、今にも泣きそうな顔をして、それでも

笑った

笑ってくれたのだ

だから俺も笑う

一番嬉しいときの笑顔をつくって

「さよなら……いままで、ありがとう」

そう言って、ぼろぼろと涙をこぼす母親の背を見送る。

後に残された俺は、まだ笑っていた。

笑いながら、泣いていた

どんなにつらく当たられても

どんなに殴られても

彼女はこの世界でたった一人の母親だった（・・・）

もうあの声を聞くことはできない

もうあの顔を見ることはできない

もうあの手に触れることはできない

名前を呼んでももらえない

なんで俺ばかりがこんな目に合わなければいけないの？

今までに何度も何度も思った言葉が頭の中で木霊する

これが自分に与えられた罰なのだと、理解しているけれど思わずにはいられない

きつと二度と会うこともないのだろう

だから、これだけは伝えたい

いまままで、ありがとう

S a i d
O u t

少年は森の奥へ奥へと進んでいった。

だから知らない。その日の夜に森の近くで一人の女性が息を引き取ったことを……

第三話 転生（後書き）

次の更新まで結構時間がかかるかもしれない……。
申し訳ない！（スライディング土下座）

第四話 能力制限 (前書き)

今回はあんまり内容は進みません。

なんかどうでもいい話になってしまった・・・

2011.6.10に一部追加&訂正

第四話 能力制限

S a i d R e i

どうもこんにちは、零です。

母親かあさんに捨てられてから3日が立ちました。
あの時は本当に悲しくてつらかったのですが、今はそんなことをのんきに話している場合ではありません。

今の状況を簡単に説明すると……

遭難しました。

外から見たときはそんなに深そうじゃなかったよ!?

くそう……母さんがいつてしばらくしてから森から出ればよかったですかな……。

しかしすでに今いる場所が森のどこなのかさえ分からない。

「……いつそのこと森で暮らすか?」

でもそうすると転生神メテンフツコウジンスとの約束を破ることになる。

それ以前に今が一体いつで、ここがどこなのかすらわからない。

うゝむ………いつたいどうするべきか。

ガサッ

「……!?!?何奴!!」

背後の茂みから気配がした。

反射的に足元にあった小石を拾い、茂みへと投げつける。

ゴスツと音がして当たった気配がした。

やった!と思っていたその時・・・

『グオアアアアアアアア!』

当たったのはまさかの熊でした。

走る走る熊。逃げる逃げる俺。

わあ〜熊さんと追いかけてっく〜、なんていえばメルヘンチックだが、血眼で追いかけてくる熊は恐怖としか言いようがない。

森のくまさんの歌みたいにすたこらさっさっさのさ〜で逃げ切れる相手とは到底思えないな。

大きさからみてもヒグマやツキノワグマのレベルじゃない。軽く見積もって3m、どこかの絶滅動物じゃないのだろうか？

ここが「日本の心臓」と呼ばれる樹海、闇ヶ谷やみがたになら話は分かるが、あそこは近くに町はなかったはず。

考え事をしていたせいで木の根に足をとられ、転んでしまう。

やっぱ・・・

後ろを振り返ればすぐそこに大きな熊、絶体絶命だ。

しかしその刹那、熊は黒い炎に包まれて消えた。

俺は、ああそういえばこんな能力もあつたんだつたかなと思り返し苦笑いをこぼした。

半径10mはぶすぶすと言いながらまだ少し燃えている。

『ブラックフレイム
黒炎』それがこの能力の名。

使用者に危害を加えるものすべてを消し去る地獄の劫火。
その黒き炎にひとたび触れれば体を蝕み一瞬で無に帰す。

そこで思った。

こんな能力あつたらうっかりで主人公ケンイチとかも殺しちゃう
んじゃない？

それは困るな……。主人公を死なせないために来たのであって、

俺が殺しちゃ元も子もない。

うーん、困ったな……。って!!

そうだ、忘れてた! そんな時のためにこの前の能力をもらったんじゃないか!!

この世界に転生してくるにももらった力のセーブ能力。

俺はすぐさまその能力を使い、この世界で使ってもある程度大丈夫そうな能力以外に封をした。

これでしばらくは大丈夫だろう。

そんなことより今はまずここから出なければ

まずは腹ごしらえ、と焼けた地を後にした。

S a i d
O u t

第四話 能力制限 (後書き)

つ、次ではちょっと進歩するはずです!?

とりあえず零を拾った師匠の名前は「紫苑しおん 朽?くちか」になりました。
ついでに零が消した熊は絶滅したショートフェイスベアのつもりで
す。まさかの全長3.5m・・・。
どこにいるのかは次で明かすつもりです。

第五話 出逢い〜前〜(前書き)

久々の更新です!!

第五話 出逢い〜前〜

Side Rei

捨てられてから約三カ月が経った。

未だに森から出られずにいたりしてしまっただが、もうあまり気にしないことにした。

確かに原作が始まってたらけっこう焦るけど、今の状態でいっても足手纏いにしかならないのだから仕方ない。強くなるまでここで修行するつもりだ。

とりあえず原作介入までに弟子級の中で最強ぐらいにならないと。それが無理でもせめて、美羽と同じレベルぐらいが理想かな…

一人でできるかわからないが、がんばるしかないか

「先は長そうだな…」

だんだん空が暗くなってきた。

そろそろ日が暮れて寒くなる。家代わりに使っている洞穴に帰って火でも焚かないと。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

三カ月前からこの森に俺以外の人の気配がする。

最初は、入ったが最後生きて出れないと有名なこの山の奥に入ってくるなんて正気の沙汰とは思えなかった。

また自殺者かとも思ったが既に三カ月が経っている。後者ではないようだ。

それにしても、いる事は確実なのに何故その人物が捜しても見付からないのだろうか…？

気配も異様だ。入って来た時は小さな子供のようにだったのに3日目に一瞬だが、この世のものとは思えないほどのどす黒く、闇より暗い光を発した。

こんな気配は普通、一般人はおるか達人マスタークラスでさえ発することはない。というより発せない。

気になって捜してみたがどこにいるのか全くわからない。

本当、どうなっているのやら

「…！」

森に人が入って来た。今度はやたら人数が多い。…密猟者だな。気配は13。面倒だ。

!?!?…違う所からまた3つの気配。今度は全て達人、しかもA級…。
マスタークラス
いったいなにがあるっていうんだよ。

久々に楽しめそうで俺は舌なめずりをする。

ちょうど今日は満月。暴れるのはづつてつげだ。

このとき俺は暴れることしか頭になくて、可笑しな気配のことなど
既に忘れていた。

s i d e o u t

第五話 出逢い〜前〜(後書き)

短い文でスミマセン(〜)〜
次は慣れていない格闘(?)シーン…どうしよう(〜)〜(〜)

第六話 出逢い〜中〜（前書き）

初めに書きます。グダグダです！！

第六話 出逢いの中

Side Rei

今夜は、何かが可笑しい。

森や動物がざわめいているのだ。

昔から俺は動物や木々などの声なき声が聴こえる。

《キケン、キケン》

さつきからずっとそればかり。

この能力はもらったものではなく、物心つく前からあったものだ。

靈感やら霊力やらが関わっているらしいがよくわからない。

たまに不快なものの声も聴こえてしまうので極力聴かないようにしている。

兎に角、上手く説明できないが聴こえるものは聴こえてしまうのだ
(そして何故か殆ど片言)。

一羽、闇の中から鳥が飛んできた。蒼い鷹だ。
この鷹は俺が森に入って一週間目ぐらいに罾に掛かっているのを助けてやったら、懐いてきた。ついでに名前は蒼あお。理由は羽根が蒼っぽいから。

最近では芸も仕込んで森の中の偵察が出来るぐらいまでになった。今ではアイツの次に信頼できる奴だ。

《人が侵入した。逃げる。危険だ。早くしないと撃ち落とされるぞ。》

どうやら銃を持った人間が森に入ってきたらしい。

意識を集中させて森中を視ると、確かに人がいる。硝煙の臭いと火薬の臭いを漂わしたのが13人。

違う所からもう3つ……。一応抑えているようだが、
達人マスタークラスの気と血の臭いが染み付いている。

この臭いは大嫌いだ。嫌なことを思い出す。

ハツとなり、頭を切り替えて逃げる用意をする。今のままでも勝てなくはないだろうが、達人3人はさすがにきつい。

「蒼、お前も一緒に逃げる？」

答えはきつと決まってるだろうけど、一応聞く

《ふん、解りきつたことを……》

一緒に逃げるに決まってるだろうがあああああああ！《》

「……………あ、そう」

蒼は正義感が強いから残りそうな気がしたんだけど…。意外とへ
タレなのか？

そういえば蒼も新参者よそものとか言われてたっけ。だからあまりこの森の
ものに執着心が無いのか。

少し納得した

《まあ、お前の事が心配だからな…》

ぼそりと呟かれた言葉は俺には届かなかった。

とりあえず達人が気になるので、少し見に行くことにしました！！

え、危なく無いのかって？

『ちよつとしたことは気にしない。それが、柘榴クオリティー！』

b y 母

昔、母さんが言ってた言葉。多少大雑把な気がしなくもないのだが、何となく好きだ。

そうこうしている間に人影が見つかった。月明かりが強いから、顔が見えそうだ。

え？ウソ、あれって…まさか

まさかまさかの逆鬼 至緒さんでした。

…、ちょっと吃驚して固まっちゃったんですけど？

《おい、大丈夫か？》

心配そうに見て来た蒼に大丈夫と言って、もう一度確認のため見る。

…間違いない。革ジャンを着た逆鬼 至緒、シルクハットをかぶったマイククロフト、三つ編みで見た目天使の中身悪魔、クリストファ
ー・エクレール。

本当に何でこんな所にいるんだよ。

までよ…、この3人がまだ手を組んでいるってことは原作開始はまだまだ先ってことか！

良かった。これでしばらくは強くなることに集中出来るな。

もう少し後を付けて観察してみよう。

そしたらなにかしらの情報を得られるかもしれない。

俺はいまの状態ひとがたでも使える技の一つで常時発動している、ハイド隠を動物の気配レベルから木々の気配レベルにし、後を追いつめた。

ついでに、このハイド隠というのは気配をそこら辺の木々と同じレベルまで下げることの出来る技なのだ！！

何故気配を消さないのかと言うと、突然今まであった気配がいきなり消えたりするのはおかしいと思われるだろう？

ましてや達人たちのいる中でそんなことをしたら疑われて、見つかったら一瞬で蜂の巣にされるのが目に見えているので絶対しない。

まあ、したとしても見つかるつもりはさらさらないのだが。

あとと言わせてもらえば気配が消せるとか何で思っのらるう？

生きている、つまり生命力のあるうちは少なからず体外に漏れ出るのに、それを消す事なんて出来ないのに、気配を消す事は死を表す事なのに……

ていうか、俺は誰に話しかけているんだ？…謎だ。

s i d e o u t

夜の森に降り始めた黒く輝く黒曜石に似た雨…

それは誰かの流した血なのかそれとも泪なみだなのか…

運命の歯車はゆっくりと、しかし確実に浸食され、狂いながら静かに廻り始めた

s i d e S h i o

さつきから何かに視られているような気がする。そこらにある、木々のような、小石のような。雨に紛れてあやふやになりつつある。

「なあ、どっかから視線感じないか？」

「!?(ヤバい!ばれたか!?蒼、お前どっにかごまかせ!!)」

《(おまつ、簡単に言うなよ!だいたいどうやってごまかすんだよ!?)》

「ありり?至緒ちゃん自意識過剰なんじゃない!?誰か気になる子でも出来たのかい?」

「ば、ばっきやるー!そんなわけあるか!..」

「うゝむ、十数キロに何人かの気配を感じるぞ。今回のターゲットではないのか?」

そうだ、忘れるところだったじゃねえか。

わざわざこんな辺鄙で嫌な雰囲気にする所まで来たのには理由がある。

動物、人を問わず乱獲して売りさばく密猟団が今日、“孤の世の淵”と称されるこの森で事を起こすらしく、それを追い返すのが今回の仕事だ。

それついでにここらで現れると言われている達人とやらの実態も肝試し気分で確かめに来た。

噂では東国の伝統衣装の着物を着ていたらしい。

噂から考えれば有名な辺りの、拳聖こと緒方一神齋か、無敵超人こと風林寺隼人か、またはた名も知らない達人か…。

いや、風林寺隼人は今世直しの旅に出ているから違うか。

雨のせいで悪い視界のなか、一瞬、アメジスト紫水晶の輝きを持つ飢えた獣の

様な瞳がよぎる。

ゾクリとして構えた時には既に遅かった。

「動くな」

「「「！？」」」

首にひやりとした痛みが走る。自分の首を見れば雨に濡れて紅黒く光る長い刃。

「お前ら、何故この森に入ってきた？命を無駄にするのは関心しない。」

後ろから刀を首に回されたまま問われる。
どうやら肝試し気分ではいられないみえだ。

「へっ、あんたには関係ねえだろ!!」

後ろ回し蹴りを放つが、全く手応えが無い。

「愚かだな。力量の差を解つていくる勇氣ある莫迦なのか、それとも差も解らないただの莫迦なのか…。」

『五月蠅いよ!』

ゴタゴタと言ってくるコイツにクリストファーがフランス語で怒鳴り、得意のサバットで応戦しようとした。

しかし一瞬で足を掴まれ投げ飛ばされ、遠くで破壊音が聴こえる。

アイツがこんなにも簡単に投げ飛ばされちまうなんて…!!

「マイクロフト!お前はクリストファーの方へ行け!!」

「言われなくてもわかっておる！」

マイクロフトが行くのを背に、争闘心が疼くのを感ずる。いつ以来だろうか？こんなに闘いたくてうずうずするのは……！！

「お前一人で俺を相手にするつもりか？」

「ああ、闘いたくて血が騒ぐぜ……。」

「勝てないと解っていてくるとは、本当に愚かだな……。まあ、せいぜい俺を楽しませろ。」

「俺は逆鬼 至緒だ。あんたは？」

「……紫苑だ。それ以上は教える筋合いは無い……。」

紅黒い刃が、ゆらりと揺れた。

s i d e o u t

s i d e R e i

おう、なんか乱闘が始まっちゃったよ！

これ俺だから見えるけど一般人の動態視力だったら全く見えないんだろうなと思いつつ横の蒼を見れば、思った通りなにが起こったのか解らずオロオロとしている。

…しっかしあれは誰だ？

漫画の方には出てきたことはないはず。

漆黒の短い髪は鷹の尻尾のように後ろに跳ねていて、紫水晶のように輝く瞳にはぱつと見殺気しかなく見えるがその奥にはまるでオモチャを見つけた子供のようなものが隠れている。

見た目的に二十歳過ぎた頃ぐらいか？いや、意外と四十過ぎてるかも。このマンガのキャラは歳がよくわかんないキャラばかりだからな。

「あ、ヤバい。」

逆鬼さんが吹っ飛んでった

それを追うように紫苑と名乗った男も走ってゆく。

「追うぞー!」

《ちょっと、まじかよ!?!》

驚く蒼をほっといて急いで後を追っていく。

ちよっと楽しんでいる俺であった。

s i d e o u t

s i d e Q r i s t f e r

マイクロフトが手当をしに来てすぐ至緒も吹っ飛ばされてきた。

少し向こうには紫色の眼が光っている。

何なんだアイツは!?

投げられたとき自分がこいつの前では無力に等しいと解った。

三人掛かりでやっても勝てるかどうか…。

今、目の前で至緒と本気の激戦をしているように見えるが、実力の一割も出していないのだろう。

例えば、今この瞬間だってやろうと思えばここにいる全員を殺す事が出来るのだ。恐ろしいとしか言いようがない。

それでも、闘ってみたいという気持ちが嫌でも沸き上がってくる。

「う、うわああああ!」

「なんだこいつら!?!」

どうやら運悪く密猟団と出くわしてしまったようだ。

密猟団はなにが起こっているのか解らず、動転して銃を乱発し始めた。

どうせだったら同士討ちでもして数を減らしてくれないかな？

バンツバンツバンツバンツ

ピシュッ

乱発した弾が林の奥の何かに当たった音がした。

そしてその瞬間、今まで味わったものとは比べ物にならないほどの恐怖を感じた。

まさにそれは、直面する死の感覚

s i d e
o u t

s i d e
R e i

ピシユッ

真横を銃弾が走り辺りに鮮血が飛び散る

頬を伝う雨とまだ生暖かい血

後ろを見れば、地面に転がった一羽の鷹…

「嘘だろ…?」

俺の好きだった蒼い羽根を紅く染めてゆく死の象徴

前には弾を放ったであろう銃を持った男達

何てことだ、俺はまた自らの浅はかさで大切なものを失ってしまった

視界がぐらりと揺れ、忌まわしいあの声が頭の中に響く

《我が主ヨ、其レハ違ウ。憎ムノハアノ低能ナ人間達ダ。》

お前の言うことが真実だとすれば俺はどうすればいい?俺にはなに
が出来る?

《カガ欲シイカイ？復讐ノ為ノカガ欲シイカイ？》
チカラ

それがアイツの為に出来る事ならば

《ナラバ欲シ口。俺ハ主ガ望メバ何時ダツテカニナルサ。
我ガ愛シイ主ヨ。貴方ハ何ダツテ出来ルノダカラ》
チカラ

ならば欲そう。蒼アイツの為に…

s
i
d
e

o
u
t

サア、 さあ、

復
讐
劇

の ノ
始

まりだ マリダ

第六話 出逢い〜中〜（後書き）

え〜、ごめんなさいm（| |）m

特にマイクロソフトの存在がほぼ空気…。

結構頑張ったんですけどやっぱり全体的におかしくなっちゃった…

（T | T）

ぐだぐだで本当すみません！

第七話 出逢い〜後〜

Side Kutika

逆鬼と名乗った男を視界の隅に捉え、右手に持つ刀で峰打ちをしよ
うとした。

しかし寸でのところで邪魔が入る。

密猟団が動転して銃を乱発したのだ。十数発当たったところで問題
はないのだが、人が楽しんでる時はやめてほしい。

飛んで来た弾を刀の腹で弾き返しながら思う。

人の遊びを邪魔する奴は馬に蹴られてなんとやら、と言っとか言わ
ないとか。

次の瞬間、近くの林から凍てつく氷のような冷たい殺気を感じる。

ゾクリとしてその場から後ろへ飛ぶ。

今まで闘っていた男も気付いたようですぐにその場から離れた。

シュッ

一筋の銀の閃光が走る

閃光が走った方…密猟団の一人を見れば

真っ青になり震え、厭な汗をだらだらと流している

地に広がってゆく血の池を見て、二人ほど盛大に嘔吐した

シュッ

「っ!!」

頬ギリギリの所で襲いかかって来たものを捉える。

捉えてから、さらに驚いた。

掴んだのは年端も行かぬ長い銀髪の子供の片足だったのだ。

子供はううう、と唸り俺が掴んでいた足を乱雑に振り払うと数m後ろの小高い崖の上へ飛んだ。

月明かりに浮かぶその姿は硝子細工の蝶のような儂さと美しさ、獅子のような荒々しさと雄大さを兼ね備えており、未知の神々しさの

よじなものであった。それはまるで

まるであひる荒神あひるのようだった

『ウヲオオオオオオオオ』

鳴き声、というよりは遠吠えに近い声を発し、血に濡れた銀の髪を靡かせながら殴りかかって来る。

「なっ!?!」

その拳を掴もうとして気付く。

拳が“動”の気を纏っている事に

その気は少し前に感じたあのどす黒い気に似ている。

ははっ、まさかこんな小さな子供が放っていたなんて…

もうこの世にある物や起こる事は殆ど知っていると置いていたが、
どうやら俺の過信だったらしいな。

こんな事が起こるならば退屈だった永生ながいきも悪くないと思ってしまう

う。

これだから生せいというものは面白いというものだ

コイツとの闘いに入ろうとして三人の達人とその他のケガ人を思い出す。

とりあえずこの銀髪を蹴って遠くへ吹き飛ばす

普通ならいままで死んじまう程の力だが、アイツの場合はどうなのか…

死んじまったらそこまでの奴だったということだ

そして逆鬼とかいう男（一応覚えた）に言い放つ

「おい、お前らそのケガ人連れてこの森を出ろ。死んでもいいなら残ってもかまわないぞ。」

「っ…、解った」

仲間らしき最初に投げ飛ばした一番小さい奴が何か言おうとして、シルクハットをかぶった男に止められた。逆鬼とやらに何か言われ、渋々森を出ることに納得したようだ。

「あんたはどうすんだい…」

一番小さい奴が言ってきた。
性悪そうなのに思いやりはあるんだな…。どうでもいいが。

「さあな。まあどうにかなる」

ケガ人を背負う奴らを見送り、前を見る。

「…まじかよ」

さっきぶっ飛ばしたそいつは掠り傷一つ負ってないようだった。

腹の底からくる何とも言えない感情に思わず笑みが漏れる。

嗚呼、本当これだから人生は面白い…！！

s i d e o u t

s i d e S h i o

「おい、お前らそのケガ人連れてこの森を出ろ。死んでもいいなら残ってもかまわないぞ。」

そう言ったこの男、紫苑の眼には自分を楽しませる最高の者を見つけたという嬉しさと、闘いたいという本能的な狂喜の色を孕んでいて戦慄を覚える。

「っ…、解った」

「!?!? 至緒、どういつ」

「やめるクリストファー。今闘ってもみすみす命を無駄にするだけだ。」

怒ろうとするクリストファーをマイクロフトがなだめた。

まったく、こいつのすぐキレル所は嫌いだ。

「お前、あの男や銀色の…死神みたいな奴と殺しあって勝てる自信あるか?」

「そ、それは…」

「ねえだろ。今の俺たちの力じゃ到底無理だろうが。諦める」

渋々、といった感じで森を出ることを承諾した。

正直、あの銀髪の子供に勝てる気がしない。

紫苑という男には、三人掛かりで闘い、勝てなくても負けることは回避出来る可能性が数%有ったが、あの子供には何故か、勝てないと本能が言っている。

力や技なんて次元とは違う、別の何かが潜んでいるのだ。

勝率0%の絶対強者

そんな言葉が頭をよぎった

俺もなかなか強くなったと思っていたが、まだまだだったのか
その場に倒れている奴らを俺が4人、マイクロフトが5人、クリス
トファーが3人背負って森を下っていった

数年後、あの子供と深く関わる事になるうとはこの時想像すらして
いなかった…

s i d e o u t

s i d e K u t i k a

降りていった奴らを追おうとした子供の服を掴み、逆方向へ投げる。
しかしその風圧や重力を無視したようにそばの倒れた木の上へトン
ツと軽やかに着地した。

さっきから何発も拳を放っているが手応えがまるで無い

嗚呼、ここまで愉しいのはいつぶりだろうか？

あたり一面は最早原形を留めていない

冷静さを取り戻したのか解らないが動きはさっきより格段に良くなっている。

今度はミドルキックでも入れようか

近付こうとした瞬間、ジリツと音を立てて足の親指の爪の先がすり減る。

領域内に入った俺の爪を蹴りで削ったのだ

驚いた。コイツ制空圏を使えるのか！！

よく見れば舞い落ちる木葉にも反応している。荒いが鍛えればまだまだ伸びるだろう

まさか静と動、両方の気が使えとはな。規格外生物とはまさにこいつのことだな。

ボウッ

音に振り向けば火が放たれていた

「あはははははははははは！！燃える燃える！」

一人どこかに隠れていたらしい。こちらに気を引き付けられていたせいで気付かなかったが辺りは油臭い。

クソツ、テントランプの燃料撒いてやがったか

あっという間に一面火の海と化す

「大人しくしとけ！」

ドゴッ

火を放った輩を殴りつけて沈ませる。

もうすぐ冬だからか、空気が乾燥して火の廻りが早い。

アイツは!?

炎の中、遠くにうずくまったアイツを見つける

「おい!おまえも逃げろ!」

ここまで炎が廻ってしまったらこんなパラパラ程度の雨じゃなくて、土砂降りの大雨でも降らないと修まらないだろう。

呼び掛けても反応を見せないそいつに痺れを切らして近付く。

「...!!」

さつきまで暴れていた奴と同一人物とは思えないような力ない顔と
虚ろな目で何かを大切そうに抱えている

抱えているのはもう息のない一羽の蒼い鷹

憂いを帯びたその姿はまるで聖母が大天使のようで思わず魅入って
しまった

「あちっ」

なんとも言い難い感情から現^{うつ}へ戻されたのは無様に火が燃え移り焦
げた着物の裾が原因だった

ああ、この柄結構気に入ってたのに…
叩いて火を消す

うつかり忘れかけていたがここは今炎の海だ

早くどうにかしなければ全員丸焦げになる

出来ればそれは避けたい

気絶させた男を乱雑に左肩に担ぎ上げ、子供を鷹と一緒に右手で優しく抱き上げる。

思った以上に子供は異様なまでに軽かった

『宵の贖罪…鮮麗な…生きる者…を洗い流せ』

虚ろな瞳で小さな唇が紡ぐ微かな声。

少しだけ聞き取れた言葉にゾクリとした

ザア

瞬く間に樽をひっくり返したような豪雨になる

燃え盛っていた炎はあつと言つ間に消え、それを見計らったかのよう
うに雨も止む

「いったい…何が…？」

呆気になって子供を見るが、疲れきつてぐたりと俺に寄りかかって寝ている。

これで血が付いてなければただの若い年相応な子供なのだが…

本気でわけの解らない奴だな

起きたらいろいろ聴かなくては、と思いながら山頂付近にある自分の山小屋に向かって歩いていく

とりあえず今はこの雨で重くなった着物を着替えたいな…

2日後、森の麓でぐるぐる巻きにされた密猟団の一員と思われる男
が発見された

男は「銀の死神怖い…異境の服着た獣怖い…」と意味の分からない
言葉を発していた、と現地の住民は話した。

第七話 出逢い〜後〜（後書き）

やっと終了〜！

出来れば感想下さい！！でも酷評だけは勘弁です（泣）

第八話 養子入り（前書き）

えっと、小説に関係ないけど今日木下大サーカスを見てきました！
空中ブランドすごかったです。ライオンにキリン、シマウマ可愛か
った…

でも新体操はうちの学校の新体操部の方が大技出来てたと思う。

小説の方はぐぐぐだです

9月13日、紫苑 朽？の二つ名を変更 結構重要です。

第八話 養子入り

S i d e R e i

目覚めれば綺麗な草原…

ではなくそこそこ清潔を保っている小屋だった

右の壁には日本刀や薙刀、太刀や鎖鎌、帯剣するための帯など刀類とその装飾品が。

左の壁には鎖帷子、籠手、鎧などの防具類がある。

普通に見れば何ともない唯の武器だが、眼に意識を集中させて視ると殆どのが何かしら取り憑いていたり聖剣や魔剣だったりといわく付きの物だと言つことが解る。

その奥は……道場か？

恐ろしく広い道場だ。軽く見積もって二百坪はある。

それよりも、ここは何処なんだろう？

ポケットしていると正面の簾が上がり、人が入ってきた。

「…起きたな。大丈夫か？火傷の具合はどうだ？」

「……………は？」

火傷？

大丈夫も何も俺は火傷をしたのか？そのまえにこいつは誰だ？

疑問が頭の中でぐるぐる回る

あれ？なんか、視界がぐにゃつ、て…

「…？おい、大丈夫…」

バタンツ

「夫じゃないな…こりゃ」

盛大に倒れたようだ

〽小一時間後〽

ふわふわ

ムカムカ

「あ、起きた」

げぼげほ言いながら反射的に胸ぐらを掴んでしまった

「なんすかあんだ。俺を殺す気ですか？」

ガスマスクをつけて寝ている奴の真横で干からびた悪臭のするイモリを、右手にもつ松明で焼いているその姿は異常としか言いようがない。

ところで着物にガスマスクって気持ち悪いぐらいに似合わないね

「ちょっと特殊な気付け薬だ」

「ちょっと…？で、すか…？」

いきなりだったとはいえ冷静になってみれば相手は大人だった。

頑張って敬語にしようとして見事に失敗

「ところで、お前、何者だ？」

初対面でこんなこと普通言っか？

それに何者かと聞かれて転生者です、なんていっても馬鹿にされる
だけだろっ

ここは無難なことを言おう。

「…四歳児です」

…言っという難だけどこねって無難なのか？

「そうか…」

何故か納得してくれた

「お前、家はどこだ？」

「…家はありません。捨てられたんです」

さも悲しみに耐えている様な顔をする

いや、実際悲しいけどね？　なんかもう慣れちゃったんだよ。

「そうか…」

しばらくの間沈黙が続く

「そう言えば火傷の具合はどうだ？」

「えっと…、俺はどこに火傷をしたんですか？」

傷みを感じないところからもう既に治っているんだろう。

「…？何処って背中 of 広範囲に…：傷みを感じないのか！？（まさか感覚が無い？捨てられたと言っていたから虐待されていてその後遺症という可能性もあるな…。こんな小さい子供が捨てられるなんてこの国の治安はどうなっているんだ）」

なんか考え初めてしまった…

そうしているうちに少しずつ思い出して行く。

うっかりであるとはいえ逆鬼さん達計三人の達人に遭遇したこと、目の前にいるこの男がその逆鬼さんですら太刀打ちできなかったほどの達人ということ。

蒼が死んだこと、そして、俺の中で何かが壊れ、彼奴の力を借りてしまったこと…

ああ、また俺は彼奴に吞まれて暴れたのか。不甲斐ないな。いっそのこと暴れていたときの記憶が無ければいいのに…

ところで、これからどうしようか

人がいる今、聞けば森の出口をきける。

蒼が死んでしまったからもうこの森に居る意味も、未練も何も無い。

でも目の前には達人。しかも逆鬼さん以上のレベルの。

闘い方から見れば特に主となる格闘技はなく空手、柔術、ムエタイ、中国拳法、古流武術、プロレス、剣術、テコンドーなどをごちゃ混ぜにした武術、つまり我流武術だろう。風林寺隼人と同じあたりか。

いや、実際闘えば風林寺隼人の我流より厄介かもしれない。

ほぼ防御を捨て、攻撃に特化している。

いつその人に弟子入り…いやいや！早まるな俺！！

闇かもしれないし、そしたら俺が兼一を殺すことになるし、まだこの人の名前すら知らないし！

「…かいつの間にかシャツ引っ剥がされて背中見られてる!？」

「（火傷が消えている!？昨日まで酷い赤黒の跡が残っていたのに…それに捨てられたと言っていたから保護しないと…）…お前、帰る家がないんだな？」

「ええ、まあ」

「だったら…」

俺の家に住まないか？」

「はえ！？」

おっといかん、変な言葉を発してしまった。

しかしこの人はなにを言い出すんだ？

衣食住の安定していないこちらとしてはありがたいが。

「いや、帰る場所がないのなら俺の家を使ってもいいという意味で……（捨て子を保護なんて言えるわけねえだろ！！）、その、お前には武術の才もあるから俺の弟子にならないかという意味でもあつてだな、…あゝあゝもうめんどくせえ！！」

「…！？」

ドサッ

肩に衝撃が来て、目を開けてみたら紫色の綺麗な瞳と、その後ろには天井があつた。

どうやら押し倒されたらしい。

何故？

「つまりだな、俺の養子になってくれないか？」

「Why？」

弟子とか内弟子飛ばして養子ですか？

てか、押し倒した意味絶対ねえだろ！じゃなきやおまえはロリコンか！？いや、シヨタコンか！？

「えつとすみません。養子にしてもらえるのは有りがたいのですが、一つ質問です。あなたは殺人拳ですか？それとも活人拳ですか？それ以外にも質問はかなりあるんですがとりあえず今はそれだけ答えてくれればいいです」

パニックってるけど、聞くところはしっかり聞かなければ。

焦った方の負けと母さんも言っていた。

「ああ？俺は殺人拳でも活人拳でも無いが？強いて言えば両方か。お前ならきつとどちらの世界でも生きていけるだろう。…そう言えばまだ名前聞いてなかったな。俺は紫苑 朽？だ。お前は？」

「柘榴 零です」

あそこの家には名字がないから柘榴と名乗る。

「そうか。じゃあこれからよろしくな、養子^{れい}。」

にこりと笑った笑顔に、普通の人だったら見惚れるんだろうな、と思う。

しかも、俺が納得するより先に養子入りは決定したようだ。

子供ガキに決定は無い

そう言うことか？

いや、この笑顔からそんな感じは一切しない

なら、もともとこんな性格なのか

…仕方ない。ここは話に流されてやるう

まあこの人の下にいねばきつと今よりずっと強くなれるだろうし

俺の養子になる動機は不純してるが仕方ない

では、

「これからお世話になります。宜しく御願ひ致します！義父さん」

とびっきりの笑顔を付けて

それでも一応、順応性は良い方なんだよ？

s i d e
o u t

s i d e
S h i o n

「これからお世話になります。宜しく御願ひ致します！義父さん」

凄い笑顔。天使みたいだ。否、天使だ

思わず抱きしめる。

そういえばここはアメリカ北部なのにこいつは日本名なんだな。

柘榴 零、良い名前だと思う。

「あ、あの…？」

「ん？ああすまない…」

抱きしめていたことを思い出し、放してやる

「あの、今更なんですがここどこですか？」

「ここはアメリカ北部にあるこの大陸の心臓部といえる場所“孤の世の淵”だ。お前は日本生まれなのか？日本語喋っているし、名前だって日本名…」

「いえ、その（俺はこの森の麓の村で生まれました、なんて言えねえ！）」

なにか訳ありのようだ

「言いたくないなら言わなければいい」

「…！あ、ありがとうございます…」

確かに銀髪で銀眼、雪の様に白い肌。

左目にはボロボロの包帯を巻いているのは異端としか言いようがない。

それに一度闘ってみてわかったが、こいつはそこらの師範代級、いや、下手な達人よりも強い。小さい時から人を殺す訓練を受けていた可能性もある…

火傷の手当てをしたときに見た沢山の傷跡も気になった

虐待されていたか、殺しの訓練を受けている

捨てられたか、逃げ出した

戦闘能力から考えて二つとも後者だろう

(* 両方とも実際は前者です)

自分で養子にしておいて難だが、変なもん拾っちゃまったな

実は義父さんと呼ばれて少し嬉しかったのは心の中にしまっておいた

s i d e o u t

斯くして『紫冷の瞳の黒影』と呼ばれ恐れられている男と、何時か
『銀の死神 柘榴のゼロ』と呼ばれるようになる少年の生活が始ま
った…

第九話 はじめてのお使い〜前〜

Side Rei

飛ぶ瓦礫と破壊音、響く猛獣の唸り声

家は半壊で屋根などほぼ無くなっている。…一昨日崩れていたところを直したばかりなのに

俺の立っている小屋の前から見れば道場も含め最早廃屋状態だ。

ドサリ、と持っていた重い物袋を落としてしまった

卵入ってたのに。割れてないかな、流石にもう一度山の麓まで降りるのはめんどくさい。

ふと見た見た地面の所々に飛び散っている赤いどろっとしたものは…、

うん、見なかったことにしよう

あはは〜、空が赤いな〜。夕方だから太陽も真っ赤だ〜。眩しいな〜

何があつたんだよ!?

s i d e
o u t

零が養子になって一週間たったときに起きた事件じけんだった…

〜遡ること13時間前〜

『びびびびびびびび〜、朝です。起きましよう。4時です。起きましよう。』

「うう〜ん、あと5分…いや、5時間…」

『起きましよう。起きましよう。起きましよう。起きましよう。』義父さん起きる！今日も昼過ぎまで寝る気が!?!」

グシヤッ

勢い良く入ってきた零により3個目の目覚まし時計が踏み潰された。

「んあ？ああ朝か。つておい、まあーた時計壊したのか。本当、その小さな体のどこにそんな怪力があるんだか」

「義父じふとさんの修行しゆぎんのおかげで筋力体力瞬発力動体視力その他諸々約1・2倍になりました！」

「元がアレだからな、1・2倍も伸びただけですすごいと思うぞ。」

そう、零はこれまでの修行中に幾度も紫苑を驚かせるような身体能力の高さを見せていたのだ。（例・崖の側面を走って上る、蹴りでクレーターを造るなど）

零が養子になってから毎日強制的にある軽い運動という名の拷問が異様で異常とはいえ、規格外の能力から1・2倍も伸びたのは正に奇蹟と言える。（魂の記憶は移行されるが身体能力は殆ど移行されず、武の才のみで生まれ変わって再スタートとなる）

「ご飯が出来ましたよ。今日は魚の塩焼きと、魚と合わないけどパ

ン、スクランブルエッグ、旬の果物です。」

「またパンか…。米が食いたいな。」

「無理言わないで下さいよ。そもそも俺が来たとき既にこの家に食物らしきものが何も無かったでしょう!？」

養子に來た日、零が夕食を作ると言って最初に言われた言葉が「食材がない」。二言目は「台所が無い」だった。

聞けばいつもはそこら辺で採った山菜や魚を焼いてその日暮らしをしていたらしい。

それでもたまに無性に故郷の米が食べたくなって日本に帰るといふ。

日本に帰る理由がそんなもんでいいのか気になるところだ。

そして今、その禁断症状が出かけているようだ。

「ああそつだ。米食べたいし、お前も日本名だし日本語喋っているしこの際日本に帰るか。米食べたいし。」

「ワゝタクゝシ、ニゝホンゴワゝカリゝマセゝン」

「何いきなり片言で喋ってんだよ。ゝがやたら多いし」

「(だって日本行つたらなんかしらのフラグ建つじゃねえか！弱いうちにフラグ建つても困るんだよ！！フラグを甘く見んじゃねえぞ、何時の間にかフラグ、しかも死亡フラグが建つんだからな！？)」

「まあもともとお前に否定権も拒否権もなにもないがな。そつだ、数年後に“久遠の落日”もあるしメディアの発達した日本が狙われるだろうからあっちを拠点にするか…」

「久遠の落日…？(確か漫画の40巻辺りでやっと出てきた単語だ

ったよな…。あつれ〜？もしかしてあと数年後に原作開始？それって………かなりまずくね？俺まだ弱いのに。つーか既に養子にとられたことで久遠の落日フラグがたってる！？）」

口を押さえて考えごとをしていた零を少し不振に思いながらも紫苑は口を開いた。

「今はまだ知らなくて良いが、何時かお前にも大いに関わってくるぞ。（なんてつたって何時か俺の相棒として二十歳までには、少なくとも一人でA級達人10人を相手して無傷、且つ1分以内で倒せるようになってもらう…いや、なってもらうではなくさせる、だな。絶対させる。なんせ達人への崖を既にこいつはすごいスピードで墜ちつつあるからな。俺の養子になったことで更にスピードアップしてるが）…まあ何時あるかぐらいは知っておいた方がいいかもな。確かあと10〜12年後ぐらいだったはずだ。それまでには達人級が相手でも引けを取らない程度にはなってもらわなくては困る」

「ふ〜ん？（ええと、確か兼一が高二くらいの時、もう直ぐだとか闇人がいつてたから17の時に起こるとして、10〜12年の真ん中とって11年後なら今6歳…。まさか俺、兼一よりも2つ下！？同年代じゃないのかよ、アイツ（メテンプシコウシス）間違えやがったか？それともあえて年齢をずらしたのか…。どちらでもあまり変わらないが）」

新たな事実思わず考えにふけり、紫苑の考える恐ろしい言葉に気付けなかった零だった。

「そんなことより零、お前今日買い物行け。食料そろそろ無くなるだろ？最近減りが早いからな。二人もいるんだから当たり前だが。」

「何が減りが早いだ。もともと何もなかったくせに…」うんうん、誰かさんも美味しい美味しい言いながら一人で五人前食べるし。まあ本当に美味しそうに食べてくれるから嬉しいけど」

「（うぐっ、流石に五人前食べるのはまずかったか。なにか言い訳…、そうだ！）ああ、どっかのおちびさんの料理は一回に作る量が異常だからな。美味いけど」

「（誉めてんだか貶してんだかわかんねえよ。チビだったところは貶したんだらうな）…とりあえず、誉め言葉として受け取っておこう」

「（…スルーしやがった）…まあいい。このメモの食料と道具、素材を頼む。」

「…わかった（人使い荒いなあ、おい）」

チラリと零はメモを見て、目を見開いた。

「ちょっと待て！これどう見たって下町程度じゃ揃わないだろ!？」

「ちっ…気付きやがったか。…本当、四歳児のくせに知識はあるよな」

「いや、誉めたからって妥協しないから。ていうかそれは誉めてんのか!？」

「誉めてんの」

「…誉めてたんだ?」

「ああ、そうそう。これもってけ」

そう言っつて紫苑は零に向かつて小さな丸い銀色のプレートを投げた。プレートには毒々しい紫色で独特の文字で何か書かれている。

「…何これ？」

「それをある店に持ってけばメモに書いてある物のほとんどが驚きの破格で揃う。ほら、地図だ。」

「…。(何か嫌な予感がする…)」

「じゃあ行つてこい。道中気をつけるよ。…誘拐されないかな、ナンプアされたり絡まれたりしないよな…。ああ、でも零可愛いし、うああ、心配だ！」

偶に過保護な紫苑だった。

「そんなに言うなら養父とっさんが行つてこいよ」

「それはめんどくさい。(キツパリ)」

「…(うぜえ…!)」

一悶着あつたあと、外出用に紫苑のおさがりを繕つた灰色の袴みたいなを着、小屋にあつた布を使って作った簡易式の黒い外套を羽織つて零は家の裏へと向かった。

「蒼、行つてくるよ」

そこには小さくて黒い石の建てられた蒼の墓があり、零は毎朝、此処に花を添えている。

上を見上げるとこの前直して綺麗になつた屋根が目に残る。

直すのめんどかつたな〜と思ひながら町への道を地図を見ながら進んでいった。

s i d e k u t i k a

つい最近家に（半強制的に連れて）来た我が養子、零は武術の才能が異常なまである。

心技体どれをとっても今まで見てきた弟子級を初期状態で既に二廻りほど上回っていた。

それだけなら普通に喜べたのだが、数日修行を付けて気付いたことがもう一つある。

アイツには武術家や武器使いに必ずある、持っていないなくてはならないものがないのだ。

“ 殺す覚悟 ” と “ 生かす覚悟 ”

それがない。

本当に謎だ。この歳にして既に“死ぬ覚悟”が出来ているのは動きから見て解る。

無い二つの覚悟よりつけるのが難しい物を持っているのに、何故基本が成っていないのか本当に謎過ぎる…

もしくは、今までの生活でそうならざるを得なかったのか

気になるところだが零が話す気になるまで聞かないつもりだ

ゆっくりと立ち上がり零の作っておいてくれた朝飯を食べに行く。

塩焼きが美味しい…

零には米が食べたいから、なんて言ったが本来の目的は他にある。

日本にある梁山泊の達人たちの技を覚えさせる。

それに危険な仕事に行くときはあそこに預ける事が出来るし。

もともと行く予定はあった。

行くのが少し早くなったと思えばいいだろう。

人生は長い。こんな育てがいのある奴が舞い込んで来たんだ、楽しまなくては損というものだ。

S
i
d
e

o
u
t

S
i
d
e

R
e
i

義父^{とっ}さんに渡された地図に書いてある所まで着いた。

……着いたのだが

『何だてめえ!?!』

『ここがどこだか解ってんのかあ？』

『ちびっちまったんじゃね？』

『ギャハハハハハハ』

ホントに此処で合ってるのか？

入り口からしてどっかの西部劇のギャングの溜まり場っぽかったし。

入った途端に入り口付近の奴らに絡まれて現状に至る。

よし、ここは冷静に交渉…

『おちびちゃんの来る所じゃないでちゅよ〜』

『そつでちゅよお嬢ちゃん！ここは危ないでちゅよおお』

『ガハハハハハ』

ブチッ

「誰がチビだ」

『ああん？何か言ったか』

『ただ三下の負け犬野郎が吠えてるなり、と思った事を言っただけだ』

『なっ、このガキ！』

『犯っちゃまうぞゴルア！！』

『孕ましてやるよお嬢ちゃん！』

『犯した後で性奴隷として売り飛ばすか!?!』

『綺麗な長い銀髪だ。多少傷物でも欲しがる変態マニアがわんさかいるだろ!?!』

『…下品極まりない。視界に入れるだけで虫唾が走るな。』

これ以上会話もしたくない。

この身長では届かないので普通の人には少しだけ速い（俺にとってはかなり遅い）スピードで相手の頭の高さに飛んで手刀を首に入れる。

雑魚にはこれでも強すぎたか？

一瞬で八人ほどのギャングが足元で伸びる

『お嬢さん、まだ小さいのにお強いですね…』

店の奥にいるバーテンダーの老人が話しかけてきた。

左側は眼帯を付けていて見えないが、気配で分かる。

数人は鬨気や殺気を押さえ込んでいる。

中にはそれを隠そうとしない奴らもいるな。

あとは…達人級か？かなり気を隠すのが上手い。

できるだけそつちを見ないように、目を合わせないように、ついでに伸びている奴らを踏まないようにカウンターまで行く。

142

『こんにちは』

『……悪いことは言いません。早く家に帰った方が』この店に来ればこのメモに書いてある物のほとんどが驚きの破格で揃う、と言われたので来た。それと俺は男だ』：それは失礼しましたな。それと、誰に聞いたかは知りませんが、ここはただ酒場です。きつとこをよく思わない方々の流した噂でしょう。（この少年、どこでこの事を聞きつけたんだ！？）』

む、俺が小さい子供だからってしらばっくれる気か？

思考を読まなくても昔貰った透視能力で何があるかは一目瞭然。

地下深くにたくさん人が居るのは解ったが、人に話しかけられたことによって探索が断られた。

『少年、ここはお前のような子供が来るところではない』

誰だよ話しかけてきたの？

『……』これはこれは！お待ちしておりました。』

後ろを振り返ると

「ぶぶっ
「

サングラスを掛けた人越拳神こと、本郷晶さんだった

アメリカでもフラグって建つんだね…

S
i
d
e

O
U
T

一応、柘榴零を描いてみた！！

タイトルの通り、一応ですよ！？ただのイメージですから、下手でも文句言わないでください！！（土下座）

そして読み込みが失敗してURLだけになってしまった・・・

それでもokという心の広い方だけ、どうぞ

？

？

？

<http://4052.mitemin.net/i31881/>

零、基本バージョン

http://4052.mitemin.net/i31882/

歪^{ストライク}バージョン

http://4052.mitemin.net/i31880/

鎖鎌を持たせたつもり

http://4052.mitemin.net/i31879/

笑顔の零

以上です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044t/>

史上最強の転生者レイ

2011年9月29日22時45分発行